

ケーススタディ

業種

保険

プロフィール

世界でも有数の歴史と規模を誇る再保険会社です。25か国以上で事業展開し、2020年にはForbesからグローバル2000のトップ企業に選ばれています。



“

「Denodoのサポートにより、最重要のユースケースを約2週間でテストできたため、担当部署で最適なソリューションという結論に即座に達しました」

- ITソリューション開発および品質保証担当の責任者

スイスの再保険会社、Denodo Platformを活用して新商品をリリース

会社のリスク管理部門では、信頼できるサービスとサポートを大手保険会社に提供し続けるために、日々、該当リスクをすべて考慮して損害の原因となる事象で複雑なシミュレーションにより損害額を算定する必要があります。

ビジネスニーズ

同社のリスク管理部門は、増加する規制要件に苦慮しており、リードタイムや顧客満足度に悪影響を与えていました。そのため、生命保険や損害保険、投資事業において、すべての下位領域のリスクを包括的に把握する必要がありました。2000年頃から、同社はこのニーズを、第三正規形の従来型データウェアハウスアーキテクチャでサポートしました。そして、Oracleをベースにして、多くのETL（抽出、変換、ロード）処理を利用していました。レポート生成にはデータマートを使用していました。

やがて、このアーキテクチャでは、いくつかの課題に直面します。具体的には、インフラが対応できるメジャーリリースは年に3〜4回に過ぎず、高頻度の新規規制要件により保険業界が打撃を受けた事態に対応できませんでした。さらに、アジア市場での需要が高まったことで、課題はますます深刻化しました。

IT責任者の回想によると、アジア市場は一斉に覚醒しました。ヨーロッパでソルベンシーIIとスイスソルベンシーテストが発表されると、アジアも追従しました。アジア市場はまとまりがなく、国ごとに異なる要件があるため、多くの新しい要件が急速に押し寄せました。これによって、従来型データウェアハウスでは対応できませんでした。

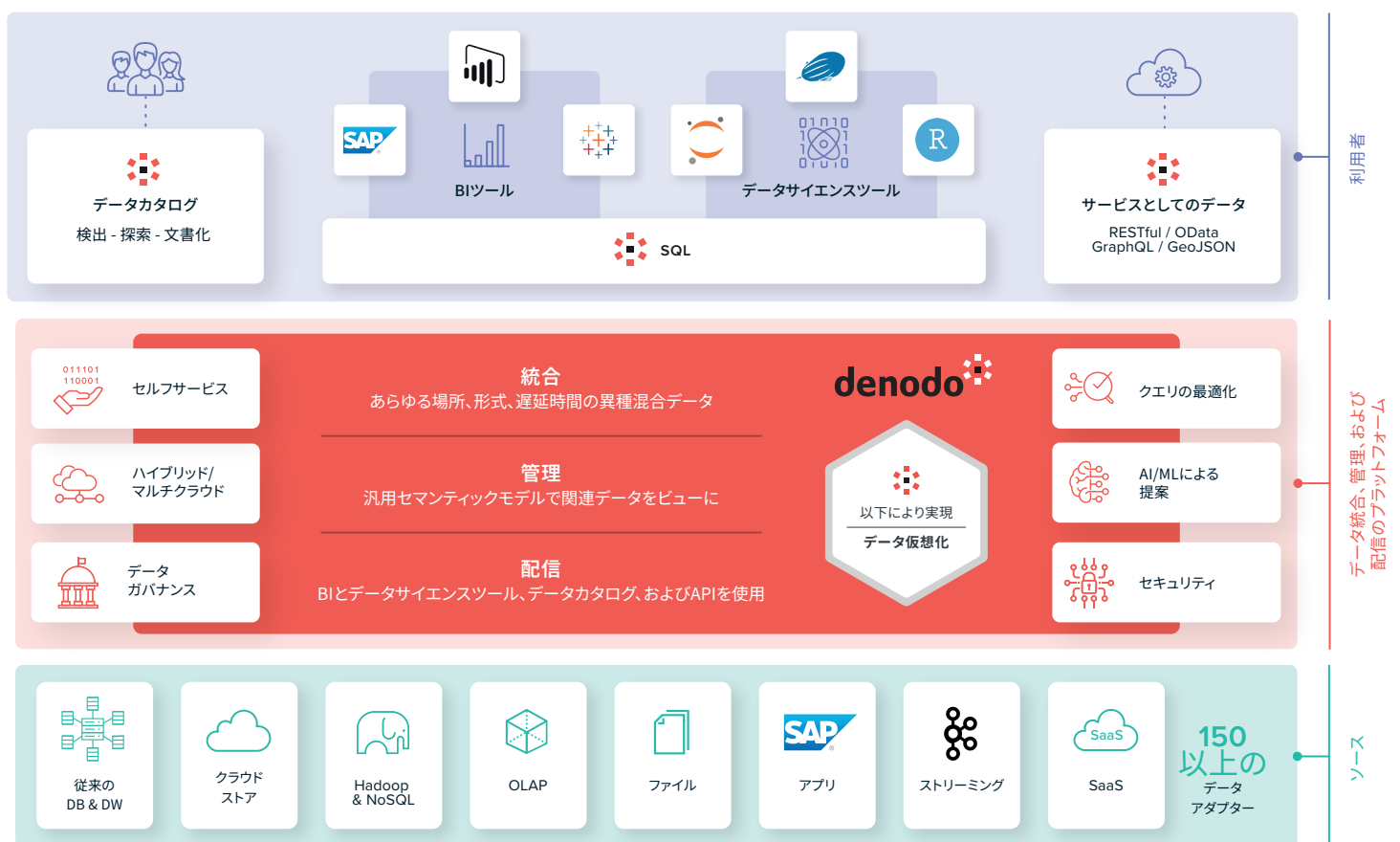
同社のデータウェアハウスの限界は、変更ごとに必要なリードタイムの時間に現れました。リスク管理部門は、社内担当者に重要レポートを規定時間内に送達できなくなり、会社とその顧客の双方に不満が募りました。同社は、すべてのデータインフラをオンプレミスでホストしていましたが、クラウド移行を決断しました。

新しいアーキテクチャでは、データアクセス速度、可用性、柔軟性を改善する必要がありました。データのアクセスは、ほぼリアルタイムで一元的にできる必要があるだけでなく、システムやユーザーからもできる必要がありました。また、同社は、DevOpsの活用により高度な自動化を実現して、リリースの加速を可能にしたいと望みました。同時に、ユーザーの生産性が、アーキテクチャ変更とクラウド移行の影響を受けないようにする必要もありました。

ソリューション

同社はまず、データボルトモデルに移行し、メタデータ管理システムを構築して、プロセスの自動化を可能にしました。次に、データ仮想化ソリューションを導入してデータアクセスを容易にすることになり、損害保険部門で利用実績のあったDenodo Platformを選択しました。短期間のテストフェーズで概念実証を実施した後、リスク管理の新規アーキテクチャにおいてもDenodo Platformが重要な役割を果たすことが明らかになりました。

Denodoのサポートにより、最重要のユースケースを約2週間でテストできたため、担当部署でDenodo Platformは最適なソリューションという結論に即座に達しました」とIT責任者は述べています。「もちろん、市場を調べて、他のソリューションも視野に入れましたが、Denodo Platformは当社の要件を即座に申し分なく満たしたため、他のツールを評価する理由はありませんでした。」





利点

Denodo Platformで実現した真価は、実稼働に入った瞬間から明らかでした。dDenodo Platformにより開発が加速され、極めて短時間で最初の成果が得られました。新たなデータソースを数分で統合でき、フィードバックループを高速化できました。また、高速プロトタイピングにより、何らかの要件（レポート生成のデータ要件など）や最終的に使用されるデータソースが未定義な場合でも、ユーザーリクエストに対する初期フィードバックを送付できました。

IT責任者によると、Denodo Platform上で可能な開発のスピードに担当者は本当に感激しました。事前にソースを仮想的に統合することで、数時間後には最初のサービスを再現できたので、ユーザーがDenodo Platformで利用できました。ユーザーからのフィードバックにより、要件の明確化と再調整を反復プロセスで実施できたので、自然とユーザー満足度が急上昇しました。

現在、同社のリスク管理部門は、システムの更新と拡張が常に行われている中でも、Denodo Platformを使って要件のすべての範囲に対応できます。システムは、四半期ごとのリリースではなく、継続的な管理リリースに対応するので、必要ならば1日に10回も変更しています。ユーザー照会の対応時間は、平均2〜3週間から数時間に短縮し、その間に最初の暫定版をユーザーに送付できます。

また、ユーザーは短い反復サイクルで要望を記述して、長いフィードバック応答時間を経ることなく必要な結果をすぐ正確に入手できるため、ユーザー満足度は急上昇しました。そして、Denodo Platformのデータ仮想化レイヤーを採用すれば、後でデータソースが変更された場合や、バックエンドやストレージ側が変更された場合でも、同社のユーザーインターフェースは常に安定したものとなります。このように、背後にある技術の複雑さをユーザーから隠しているため、ユーザーの生産性を阻害することなく、アーキテクチャの変更とクラウド移行をバックグラウンドで継続できます。

IT責任者によると現在、Denodo Platformは同社の5部門で採用されてインフラに不可欠になっています。担当者はDenodoの協力に大変満足しています。

